

## 第5分科会 地域学校協働活動

会場：かながわ県民センター（ホール）

### 研究テーマ

地域学校協働活動において地域の資源を生かし、活動をとおして地域の活性化を図り、積極的な世代間交流につなげる取組について考える。

### 事例発表者

見附市（新潟県）

見附市社会教育・スポーツ推進審議会委員

江田 隆行 氏

真鶴町（神奈川県）

真鶴町社会教育委員会 議長

奥津 秀隆 氏

真鶴町社会教育委員会 副議長

古川 昌子 氏

真鶴町社会教育委員会 委員

倉澤 良一 氏

### 助言者

国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部長

藤原 文雄 氏

### 会場責任者

横須賀市社会教育委員

山岸 雅人 氏

### 司会者

横須賀市社会教育委員

山岸 雅人 氏

### 記録

神奈川県教育委員会教育局県央教育事務所

社会教育主事（兼）指導主事

谷島 花 氏

鈴木 真也 氏

## 1 はじめに

### (1) 見附市における地域学校協働活動

「ふるさと見附を愛する子ども」「世に役立つことを喜びとする子ども」を育成するため「共創郷育」の理念のもと、全市立学校にコミュニティ・スクール制度を導入し、地域と共にある学校づくりに取り組んでいる。取組の一つとして夏休み中の子どもたちに多様な体験活動を提供する「わくわく体験塾」を行っている。熟議と協働のサイクルにより、学校と地域が元気になる好循環ができています。

### (2) 社会教育・スポーツ推進審議会

年2回の審議会だけでなく、隔月で情報交換の場を設ける等、日常的に情報交換している。また、広報活動として通信を発行し、市民向け講座の企画・運営を行い、様々な人が交流する機会をつくっている。一人ひとりが行動する社会教育委員となるよう意識し活動している。

## 2 実践内容「見附市立見附中学校での取組」

### (1) 見附中学校区について

学区に5つの地域コミュニティがあり、それぞれの特徴に合わせて地域連携活動を行ってきたため、一部の生徒だけの参加になることもあった。コロナ禍明けに、学校から新たな関わり方の創造について提案があった。

### (2) 中間組織「コアチーム」と「プラットフォーム」

学校と地域の連携・協力を促進する機能を担う中間組織を設置した。「コアチーム」は地域コーディネーター、同窓会長、コミュニティ代表、教員のコアメンバーで構成し、プラットフォームの運営主体となり、コーディネーター役を担う。「プラットフォーム」は、地域資源と地域内外の関係機関・人材を結び付けて価値を創造し、それらを学校と地域に還元する。これらの組織により熟議が進んだ。

### (3) 地域と共に未来を創る活動

コアチーム会議や生徒会役員のアイディアを基に、学校運営協議会委員、地域学校協働本部委員、教職員、生徒会が集まり「地域と共に未来を創る」活動について活発に話し合った。熟議を重ね、生徒の企画段階からの参画と、サツマイモの栽培を中心に地域と学校が連携する取組を「見中ロードマップ」にまとめた。

### (4) 「みちゅまいも」と「友和祭」

サツマイモの畑づくり、苗の植え付け、収穫等を行い、「みちゅまいも」とネーミングし、学校外や生徒会行事「友和祭」で販売した。「友和祭」では、縁日や出店等、地域の方と交流する様々な取組が展開された。

## 3 社会教育委員の活動

### (1) 見附中学校への思い

見附中学校には、素晴らしい伝統があり、実力のある先生方、温かく見守ってくだ

さる地域の方々がいる。社会教育委員として、学校と地域がどうしたらうまくいくかをずっと考えてきた。毎年、生徒と先生方が変わることで特色ある取組になりにくいのではないかと思っていた。

## (2) 近年の変化

令和4年から学校と地域の会議に生徒が加わるようになった。生徒が主役だと思い、学校に関わってきたので、一緒に話せたことはうれしかった。生徒がやりたかった友和祭を復活できたことも、地域と学校のつながりをより深められたこともうれしい。今後も社会教育委員として地域の潤滑油になることを意識しながら、学校の活動をおして地域を盛り上げていこうと思う。

## 4 成果と課題

取組を振り返った生徒の「地域の人と関わったり地域貢献のできたりする行事を、これからも続けたり増やしたりしていけたらよいと思った」という感想を聞いて、うれしく思った。先輩の活動を見てきた生徒たちは、一層活発に意見し参画するようになった。継続による成果だと思う。

地域の方から「子どもが減って、学び方も多様化し、もしかしたら学校の枠はいずれなくなるかもと想像していたが、学校でやる価値のあることはまだまだあって、地域は喜んで巻き込まれていくべきだなと思った」という感想が寄せられた。

今年度、学校では「みちゅまいも」を活用した学習活動が始まった。新しいつながりの中で、学校と地域の新たな挑戦が始まっている。地域が喜んで学校に巻き込まれている。地域の潤滑油として何ができるのか、求められていることは何か、地域と学校に目を向けていく。前年度踏襲を繰り返し、活動が形骸化しないよう気を付けなければいけないと思っている。熟議の時間と場を確保し、生徒の声を聞きながら、その時の中学校と学校の状況に合わせた取組を創り出せるよう学びの場を地域社会に広げていきたいと思う。



### <質疑応答>

【質問】生徒の参加は代表か。友和祭に大人がどう関わったか。

【回答】生徒は生徒会役員等代表が参加している。大人の関わりは無理のない範囲で協力いただいている。

【質問】生徒のふり返りについて聞きたい。

【回答】学校のアンケートで「自分はやればできる人間である」等の項目で大きく上昇した。地域とともに取り組むことが、生徒の成長によいのではと報告があった。

【質問】コアチームと学校運営協議会の話題の違いは。また、コアチームはプラットフォームの代表が集まったチームと捉えてよいか。

【回答】2つの組織ができるまでは意見がまとまらなかった。コアチームの4名で話し合い、少し枠を広げたプラットフォームで話がまとまったところで全体に広げる。学校運営協議会と地域学校協働活動をつなぐ中間組織である。

## 1 はじめに

### (1) 真鶴町の概況等

人口約 6,500 人、高齢化率 46%、児童生徒約 300 人、「美の基準」のある神奈川県西部の美しいまち。小さな町だからこそできる挑戦がある。

### (2) 社会教育委員会議の状況

現在 8 名で活動している。会議は年 4 回で、諮問や答申の方式にとらわれず、現場主義という方針を取っている。

## 2 地域資源の活用

居場所・遊び場がない、習い事をする場所がない、高校生・大学生の活躍の場がないなど真鶴町の弱みが 8 つ挙げられた。これらの弱みを転換して強みに変えてきた具体事例を紹介する。様々な社会教育関係団体と連携して取り組んでいる。

### (1) 子ども陶芸教室

陶芸サークルの協力で、夏休みに子ども陶芸教室を実施した。社会教育委員の提言で、作品を町民文化祭に出品、保護者等も見に訪れた。子どもたちの自由な発想を表現する機会が生まれ、陶芸サークルメンバーの若返りもあった。地域の人が先生である。

### (2) 夜のプランクトン観察会

真鶴町には夜光虫がいる。プランクトンをテーマに、親子で参加する夜の事業を始めた。横浜国立大学臨海環境センターと NPO 法人と協力している。社会教育委員の提言で、荒天時は振替とし、毎年開催している。海が学びの場である。

### (3) 町民運動会

少子高齢化や自治会加入率低下等により選手集めに苦労していた町民運動会に、社会教育委員の提言で、誰でも楽しめる体育事業としてレクリエーション要素を強め、子どもからお年寄りまで三世代がふれあえる場にした。

## 3 他市町村との相互交流

本町にない資源は外に求め、子どもたちに体験の場を提供している。

### (1) 海と山の子どもたちの交流会

長野県安曇野市との交流を 30 年続け、毎年交互に行き来している。今年の夏は安曇野市を訪れ、小学校 4～6 年生が川で一緒になって遊び、すぐに仲よくなった。おしゃべりして修学旅行のように盛り上がり、別れを惜しむ姿が見られた。

### (2) おもしろ体験隊 農業体験・カヌー体験

神奈川県開成町で 5 月に田植え、9 月に稲刈りを体験し、お米を作ることの大変さを実感し、自分たちが収穫した新米をいただき、食の尊さを学んでいる。また、清川村で宮ヶ瀬ダムの見学とカヌー体験をしている。子どもたちはすぐにパドルさばきをマスターした。また、社会教育委員の提言で箱根町の協力を得て、森の観察会を新た

に実施した。こうした交流は一方通行ではなく、相手の訪問も受け入れ、漁業体験、磯の生物観察会、海水浴といった交流をしている。真鶴町の子どもたちにとって他市町村との交流がかけがえのない機会、豊かな社会性や人間性を育む一助になっている。学びは無限大である。

#### 4 学校との連携・協働

1 小学校 1 中学校の強みを生かし、学校との連携・協働に力を入れてきた。

##### (1) 放課後いきいきクラブ

約20年前から公民館を拠点に社会教育関係団体の協力でおはなし会、手話講座、ビーチコーミング、工作、地域に伝わるおやつ作りなど多方面の活動をしている。

##### (2) 土曜教室

平成29年度から公民館で小学6年生を対象に学習支援を行っている。近年は土曜教室を経験した高校生や大学生が加わり、社会教育委員とのつながりで外国人留学生との交流も取り入れている。6年生が翌年の参加者のために作成した漢字の問題集は、社会教育委員の提言により、介護予防教室でも活用されている。

##### (3) ふれあいの集い

中学生が公民館で模擬店を開催してきた。コロナ禍の中断後、会場をなぶら市に変更して再開した。中学生が社会性を身に付ける場になっている。

##### (4) グローバル人材育成事業

中学生の選抜メンバーを対象にオーストラリア派遣や国内語学研修を実施していたが、社会教育委員の提言で、全生徒を対象に日帰りでの語学研修実施に変更した。社会教育委員が学校と地域をつないでいる。

#### 5 まとめ

社会教育委員が実際に事業に関わり、よりよいものを一緒に作っていく現場主義という方式をとっている。事業評価報告書を持ち寄り、さらに効果的な事業に発展させていく。今後、「半島まるごと学校」をコンセプトとした新しい学校づくりにも積極的に関わっていく。社会教育委員が地域のハブとなり、学び続ける地域社会をつくっていく。

#### <質疑応答>

**【質問】** 子ども陶芸教室、長野県や開成町の活動は子どもたち全員参加か希望制か、参加率はどうか。中学生の模擬店の活動に教員の関わりがどの程度あるのか、参加しているのか。

**【回答】** 他市町村との交流は小学生4～6年生に募集をかけ、参加は1割程度となっている。また、ふれあいの集いは中学校の生徒会が中心となって動くので、生徒の様子をそばから見ていただくという形で、3～4名程度の教職員に協力いただいている。



## グループ協議及び質疑応答

【質問】公民館や担当課等行政との関わりを教えてください。

【回答（見附市）】学校に公民館とコミュニティセンターが関わり、教育委員会と首長部局がともに関わっている。

【回答（真鶴町）】社会教育関係団体の協力をあおぐ中で、活動拠点となっている公民館や所管する教育委員会が関わる。

【質問】社会教育委員がこれほど動くのかと驚いている。組織同士の情報共有や意見交換が必要だと思う。教育委員会が担当か。本市は首長部局が担当で教育委員会との関わりが少ない。

【回答（見附市）】社会教育と学校教育がそれぞれだったが、中学校の会議に生徒を入れた。生徒の発想を生かす熱意が社会教育と学校教育の一体化につながった。

【回答（真鶴町）】社会教育委員がどこまでやるかは皆さん迷うところだが、私たちは総掛かり。地域のことを自分事にして、自分たちにできることを考えてきた。

【助言者より】社会教育委員の法令上の仕事をしようと思ったら現場に関わらなくては見えてこない。自分たちも社会教育に育てられたという。

【質問】学校のことは、従来からあるPTAでよいと思う。PTAを任意団体と放り出して新しい組織をつくるのか。

【助言者より】教職員も保護者も地域住民も子どもの幸せを思う。生活が変わり、かつてのPTAモデルが成立しにくい。PTAも大事だが、地域みんなが関わる組織にした方がよいと議論があった。

【意見】PTAの現役ができないことは支える。教員は働き方改革の動きもある。

【助言者より】地域だからできる活動、学校と連携するからできる活動がある。

【回答（見附市）】地域の潤滑油になれるかと活動してきた。子どもも教職員も減っている中、地域総掛かりで子どもを育てる。友和祭に行き、様々な世代が学校にいて驚いた。社会教育委員をやっていてよかった。

【回答（真鶴町）】地域全体で担うことが大事。社会教育委員がハブとなり、ネットワークを広げていく。

社会教育委員として、先輩の姿から学び、自分の得意を生かし、必要なものをつなぐ。子どもの成長をずっと見守れることを幸せに思う。次世代につなぐことにも力を注いでいく。

子どもは町の宝、町ぐるみで育てる。社会教育と学校教育がつながることで、人づくり、まちづくりになる。



### 国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部長 藤原文雄氏

「地域学校協働活動を通して世代間交流を進める」というテーマについて、2つの報告から多くの学びを得ることができた。

地域学校協働活動には法令上の明確な定義がなく、その形は幅広い。地域独自で行う取組もあれば、学校のカリキュラムに組み込んだ計画的な取組もある。自治体ごとに、それぞれの資源を活用しながら関係者が「やりたいこと」を実現できる。そうした自由な発想で地域学校協働活動に取り組めばよい。その際、学校には学校の論理、社会教育には社会教育の論理があり、互いに工夫が必要となる。

報告の中で、「子どもの成長に関わることができて幸せだ」という声があった。世代間交流が進むと、「この町に生まれてよかった」「自分が活躍できて充実している」という感覚が生まれることがある。これは、主観的な“ウェルビーイング”に位置付けられる。実際、地域の方からは「生活が変わった」という声も多く、こうした取組は人生100年時代、人生120年時代にも貢献していると感じる。

また、地域学校協働活動は、子どもが自分の幸せな人生を創造する力を育むことにもつながる。社会教育を通じた出会いによって、人生が大きく変わる子どももいるかもしれない。地域学校協働活動は、自分らしさを発見し、仲間とともに取り組む力を育てる可能性がある。課題の多い時代だからこそ、単なる「担い手」ではなく「創り手」としての力、すなわち、「持続可能な社会の創り手」としての力を育むことが大切である。大人と一緒に地域に関わる中で、子どもは地域の未来を創る一員への一步を踏み出すことができるかもしれない。

真鶴町では、先輩方がつくり上げた社会教育のシステムを今日まで継承してきた。時代に合わせてアレンジし、不要なものを削り、必要なものを加える。こうした不断の更新が社会教育のまちを支えているという好事例であった。

見附市の事例は、地域学校協働活動を立ち上げる際の課題について学べる好事例であった。見附市の取組は、「学校と社会教育の連携はうまくいくのか」という不安からスタートしたという。1つ目の転機は、子どもが関わったことで場が大きく変化したこと、2つ目はコアチームをつくり、膝を突き合わせて議論し、それを広げていくという選択をしたことである。こうした場づくりの工夫に加え、「やりたいことを楽しむ」という姿勢が共有されていた点も課題解決につながったと思われる。

今回の場に参加させていただき、社会教育に関わる皆さんの熱意や展望を伺うことができた。大切なのは、それぞれの自治体の知恵を活かしながら、自分たちなりの答えを探していくことである。子どもと地域にとってどのような形がよいのか、多くのヒントをいただいた。真鶴町、見附市から素晴らしい発表をいただいたことに、心よりお礼を申し上げたい。

